

くなったら破産だ、と。トムの弟テリーもまた、安全宣言を信じた側につきました。汚染の事実を認めるのは農夫の誇りを傷つけることだし、認めたら農業を続けていけません。だから、やむを得ない選択でもあったのです。

■ガリバー旅行記の気分■

一方、六ヶ所では私が撮影していた期間、まだ再処理工場は稼動していなかった。汚染被害もなければ当然被害者も存在しない、そして核施設に対する反対運動もほとんど終息してしまつた状況でした。村人のほとんどが核燃を受け入れた、そんな村にカメラを持ち込んだのです。

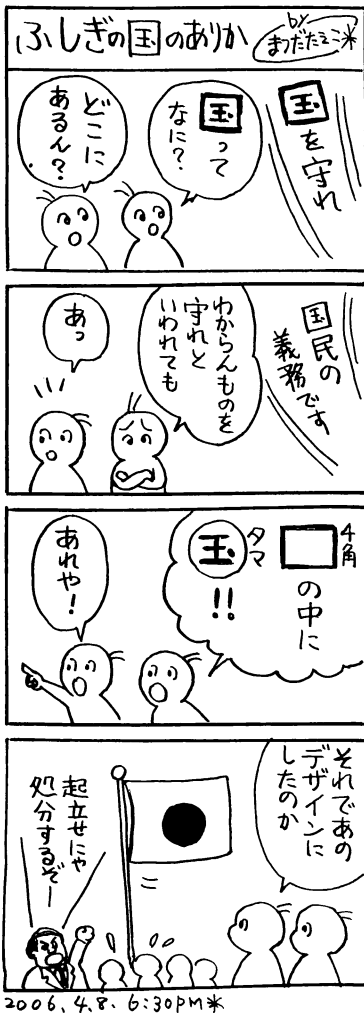
最初はガリバー旅行記のような気分でした。誰にとつても自分の暮らしの中に大量の核廃棄物があることをよしとほしくないでしょう。ところが六ヶ所ではそれが良いものであり、村にとつて必要だと

言われている。核燃を批判することが、暗黙のタブーとなつていいる。いったいどうしてそうなつたのか？新参者の私は、それを知りたいと思ひました。

■まっさらになつて話を聞く■

私自身は、劣化ウランを副産物として生み出す原子力産業を見直したい、という思いがあります。イラクの子どもたちが受けている苦難の原因がそこにあるからです。日本で原発の電気をふんだんに使っている限り、この自分自身の加害性から逃れることはできないし、それは容認できない。そんな思いがあつても、私は六ヶ所で取材する時に、反対する人からも賛成する人からも同じように話を聞こうと決めました。予断を持つて作品を作らない、まっさらになつて話を聞く、ということにしたのです。

だからといつて村人が最初から取材を



受け入れてくれた訳ではありません。どうせ反対派の映画を作るんだろう、と思われていたからです。それでも何とか、核燃を支持する人々の本音を聞くことができるようになりました。そこに私は、巨大な権力と資本が行なつてきたことの内実を見たのです。それは本当に巧妙に仕組まれ、見えないように生活の中に埋め込まれています。

六ヶ所村だけでなく、日本に生きる私たち全員がこの仕組みに取り込まれ、加担しているのです。人口一万二千の村に六〇の関連企業と八〇の建設会社があつて、この一〇年に二兆二千億円を越える金が再処理工場の建設に使われました。このお金の恩恵を受けていない人など、村では皆無に等しい。同質のお金は、マスメディアにもくまなく行き渡つています。原子力の負の部分語るな、という暗黙のプレッシャーを与え、それが非常に有効にきいています。この映画を観れば、私たちが取り込まれた罠が見えてくるでしょう。

この三月から工場は動き始めました。ハンフォードと同じことが、風下で起き始めています。反対する農家を同じ農家が批判しているのです。私たちはこれからどんな選択をしていくのか、一緒に考えたいと思ひ、この映画を作りました。

(かまなか・ひとみ、映画監督)

